沈景、與止水而可鑑、金波凝色、混細浪而難分、于時詩賦之客、筆硯得時、遇幽閑之月夜、取縱容於池亭、周遊忘歸、似行瑤池之曲、風情漸高、疑入銀河之中、所以爲佳會也、與夫魏夜徘徊、開西園之敬愛、晉月玲瓏、催北堂之賞玩者、論其風流、足誇在昔也、嗟呼人之一遇、時不再來、盍命以篇章、述其中情云爾、

〔本朝文粹八詩序〕八月十五夜、陪菅師匠望月亭、同賦桂生三五夕、　紀納言○略序

〔古今著聞集十九草木〕經信卿太宰帥に任じて下向の時、八月十五夜に筑前國筵田驛につきたりけるに、天はれ月あきらかなるに、館の前に大きなる槻ありけり、枝葉ひろくさしおほひて、月をへだてければ、人をめしあつめて、たちまちに其木を切はらはせて、月にむかひて、夜もすがら琵琶をかきならして、心をすまして天あけぬれば、たゝれにけりかゝるすき人も、今はなき世なりけり、

〔今昔物語二十四〕大江朝綱家尼直詩讀語第二十七

今昔、村上天皇ノ御代ニ、大江朝綱ト云博士アリケリ、○略中其朝綱ガ家ハ、二條ト京極トニナム有ケレバ、東ノ川原遙ニ見エ渡テ、月謎ク見エケリ、而ルニ朝綱失テ後、數ノ年ヲ經テ、八月十五夜ノ月極ク明カリケルニ、文章ヲ好ム輩、十餘人伴ヒテ月ヲ翫バムガ爲ニ、去來故朝綱ノ二條ノ家ニ行カムト云テ、其家ニ行ニケリ、其家ヲ見レバ、舊ク荒テ人氣无シ、屋共モ皆倒傾テ、只煙屋許殘タルニ、此人々壞タル緣ニ居並テ、月ヲ興ジテ詩句ヲ詠ジケルニ、踏沙被練立清秋、月上長安百尺樓、ト云詩ハ、昔シ唐ニ□□云ケル人、八月十五夜ニ、月ヲ翫テ作レル詩也、其ヲ此人々詠ジケルニ、下○略

〔江戸鹿子二年中行事〕八月　同夜○十五日月見　江府之諸人三ツまたへ舟に而行、花火立、

〔俳諧歳時記八月〕名月名高き月、げふの月、今宵の月、十五夜、三五夜、望月、月見、中秋、十五夜の月を玩ぶこと、中ごろより和漢みな然り、民間今日餅を製し、同器に芋と枝豆とを盛り、井に神酒尾花を月に供し、或ば互に相贈る、今の清人の說に、八月十五夜雨ふれば、來年元日快晴也、若十五夜晴るゝときは、元日雨ありといへるよし、或物に記したり、兩三年これをこゝろみるに、多くは違はず、　新月三五夜中新月、色白樂天詩、　端正月事文類聚、今の人八月十五夜を以、良夜とするは誤也、書言古事に、良夜は深更なりとあり、志からば秋の夜にも